

年3回刊行

TAKE FREE!!

KAISHU to SUMIDA

海舟とすみだ

～墨田区に遺る勝海舟の足跡～

創刊号

2025.11

【勝海舟玄孫・高山みな子氏連載】

海舟逍遙

墨田幕末明治グルメ

向しま 志満ん草餅

特集

勝海舟と銅像

DOUZO of Kaishu Katsu

HISTORIC SITES OF KATSU KAISHU IN SUMIDA



銅像と海舟



DOUZO of Kaishu Katsu

現在、墨田区役所の脇には太平洋に向けて指差す凛々しい勝海舟の像が建立されています。銅像は、偉人の功績や精神を後世に伝える「顕彰」の手段として明治時代に誕生しました。全国的にも有名な上野の西郷隆盛像建立にも、生前の海舟が深く関係していたのですが、そもそも海舟自身は銅像というものをどのようにとらえていたのでしょうか。本特集では、海舟と銅像の関係に迫りながら、現代における銅像の意義と、そこに込められた思いを改めて見つめていきます。



『海舟とすみだ』とは

幕末という激動の時代は、実に多くの英雄たちが歴史の舞台に現れました。中でもひととき異彩を放つ存在が幕臣・勝海舟です。西郷隆盛との「江戸城無血開城」は海舟の功績として広く知られていますが、注目すべきはそのやり取りや交渉術ではなく、幕末を通して貫かれた海舟の“人としての在り方”です。海舟は誠意と信念を胸に、幕府の要人から薩長の志士、さらには浪人に至るまで、立場を越えて交流し、心を通わせました。その姿勢が、やがて「無血開城」という歴史的な道へとつながったのです。

ではなぜ海舟は、これほど柔軟な行動ができたのでしょうか。その背景には、人情あふれる墨田の下町で生まれ育った日々があったのです。義理人情に厚い父・小吉の背中を見ながら、武士から町民、職人、農民らが一緒になって暮らす本所の下町の空気の中で、人とのつながりの本質を学びました。その精神こそが、海舟の人格の核となり、ついには歴史を動かす力となったのです。

また海舟の魅力のひとつで、時に批判を生む独特の毒舌も、本所に育った影響でしょうか。

本フリーペーパーでは、墨田に残る海舟の足跡をたどりながら、その人柄や精神の源を、知られざる逸話とともにご紹介していきます。

CONTENTS

02 特集 勝海舟と銅像

15 連載・海舟逍遥【高山みな子】

17 連載・海舟筆縁地図

18 連載・墨田幕末明治グルメ

19 特別コラム 海舟とフォントの話～秀英体と弘道軒清朝体

20 連載・海舟の写真

21 SUMIDA MAP

企画・制作 海舟とすみだ 編集部
(サンピース・グラフィックス株式会社内)

編集長 三澤敏博

発行日 令和7年11月1日

発行 (サンピース・グラフィックス株式会社内)

東京都墨田区錦糸2-8-11 トウダアレイビル2F

TEL 03-5608-1971

TEL 03-5608-1972

<https://www.sun-piece.com>

Cover photo 墨田区の勝海舟像

墨田区役所前の「うるおい広場」に建つ勝海舟像。平成15年に「勝海舟の銅像を建てる会」によって建立されました。「建てる会」は銅像建立後「勝海舟顕彰会」として発展し、毎年、海の日には「勝海舟フォーラム」を開催。銅像への献花をはじめ、講演会などの顕彰活動を行っています。

デザインの力で 墨田区を元気に。

SUNPIECE GRAPHICS

サンピース・グラフィックス株式会社
www.sun-piece.com



墨田区の海舟像2

勝海舟翁之像

墨田区本所4・6・14「能勢妙見山別院」

子母沢寛の小説『父子鷹』の逸話に基づき、妙見堂別院に建立された勝海舟の胸像です。別院が開創二百年を迎えた昭和四十九年（一九七四）、地元の有志によって建てられました。

『父子鷹』の逸話は海舟の幼少期を描いたものですが、胸像はあご髭をたくわえた晩年の姿となっています。

なお、海舟の父・小吉はこの妙見堂を深く信仰し、百日の水垢離を行ったことなどを自伝に記しています。

勝海舟翁



墨田区の海舟像1

勝安芳像

墨田区吾妻橋1・23「うるおい広場」

勝海舟が生まれた墨田区に建つ全身像。海舟生誕一八〇年にあたる平成十五年（二〇〇三）、「勝海舟の銅像を建てる会」によって建立され、墨田区へ寄贈されました。幕末の壮年期、四〇代頃の姿で、指し示す先には、かつて咸臨丸で渡った太平洋が広がります。

羽織には勝家の家紋である「可」の紋が刻まれています。勝家の家紋は「剣花菱」がよく知られていますが、そのほかに「可」の紋と「番矢」の紋が伝わっています。

上野の西郷像

建立に尽力

「偉人を顕彰する」という銅像の文化は、明治の文明開化によって日本に流入しました。

日本ではじめての本格的な近代銅像は、明治二十六年（一八九三）二月五日に落成式が執り行われた靖国神社の大村益次郎像です。明治時代の銅像で、もっとも有名な上野公園の西郷隆盛像はその五年後、明治三十一年（一八九八）に建立されました。

西郷像の建立は西南戦争によって「賊将」となった西郷の名誉回復に繋がる一大事業でもあり、その建立には西郷と同時代を生きた人々の尽力がありました。「誰よりも西郷の真意は自分が知っている」と自負していた海舟もやはりその一人で、西南戦争の

二年後、未だ戦火の覚めやらぬ世情の中で、早くも西郷の留魂碑を建立しています。海舟にとって、無血開城を英断した西郷の名誉回復は、自身に課せられた大きな宿題であったのです。

西郷像の建立計画ははじめ、明治十六年（一八八三）の八月に薩摩人の間で持ち上がり、二十五日の『時事新報』には福沢諭吉による建設主意も掲載されました。実はこの年の四月、海舟や吉井友実（薩摩藩出身。西郷の盟友）らの尽力によって、明治天皇より西郷の遺児・寅太郎にドイツ留学の恩命が伝えられました。この思召しにより、西郷隆盛の名誉回復もわずかに進んだといえます。薩摩人の間で持ち上がった銅像

計画は、そんな流れが関係していたのかも知れません。

同年八月二十日には山岡鉄舟の紹介で、薩摩藩士族の川井田平蔵なる人物が海舟を訪ね、西郷像の建立計画に賛同を求めています。ただし、さすがに時期尚早であったのか、この計画は立ち消えとなりました。

やがて明治二十二年（一八九九）二月十一日、大日本帝国憲法が公布され、大赦により西郷の賊名は除かれました。再び正三位が西郷に追贈され、その祝宴会で銅像建設が話題となりました。

西郷像の建立に向けて、中心となったのも吉井友実でした。吉井は六月十九日、計画について相談



吉井友実（編集部蔵）

すべく、海舟の屋敷を訪ねました。これを受けて海舟は、徳川家から



も献金させるように働きかけました。そして十月、『東京日日新聞』に榊山資紀と九鬼隆二の連名で、西

郷像の図案を募集する懸賞広告が掲載されるに至りました。

当初、西郷像は陸軍大将の軍服姿で、皇居正門外の広場に建立するという話でしたが、最終的には現在の兎狩りの姿となり、上野公園への設置となりました。その背景には、いかに正三位が追贈されようとも、やはり一度、「逆臣」となった者の像を陸軍大将の姿で、しかも皇居に建てるというのは憚られたようです。

明治三十一年（一八九八）十二月十八日の除幕式は、建設委員長である榊山資紀の報告にはじまり、除幕委員長・川村純義の挨拶、総理大臣・山県有朋の祝詞と進行し、続いて次の海舟の歌が川村によって代読されました。

たけびしも 昔の夢の
あとふりにける

（咲花の 雲の上野に

もつとふ いさをかたみ

君まさば 語らんことの

たちし今日かな

沢なるを 南無阿弥陀仏

我も老たり

代読した川村は「昔江戸一〇〇

万人の市民が兵禍に遭わずにすんだのは、全く二勇（西郷と海舟）の力なり。いまや靈明界を異にするも、両雄が一場に介す、勝伯爵の心事深く察すべしもの」とスピーチしました。



明治二十三年五月二十三日の『朝日新聞』に掲載された西郷像建設義捐者を紹介する広告。海舟も百圓を献金している。



独り、西郷像を見に行った海舟

ところで除幕式において海舟は、なぜ自身で歌を詠まなかったのでしょうか。

海舟の日記によると、海舟が西郷像の完成を知ったのは明治三十一年（一八九八）十月のことで、「西郷銅像成るを聞く」と綴られています。

この翌月の『朝日新聞』に気になる記事があります。十一月二十一日、除幕式の約一月前の記事で、記者に対して海舟は、ひとりで西郷像を見に行ったと語っています。「銅像の前に行ったら土方風の

自身の銅像建立には反対

男からこゝへ這入てハイケナイと大喝一聲怒鳴られたよ、己りやハイハイと云つて直ぐ歸て来た、エー氣樂でハナイカ」

除幕式に向けての準備中であつたのでしょうか。海舟とは気づかず、邪魔者扱いされたそうです。

そして除幕式より十五日後の



海舟胸像
(編集部蔵)

明治三十二年（一八九九）二月二日、ジャーナリストの巖本善治からの「西郷さんのお祭に居らした

そうですな」という質問には、次のように答えています。

「ウー、演説とか何とか言ふから、怒りに行ったのサ。寒くて、たまらないから、小使部屋の方に行つて、温つて居たよ。どうも出来がよくない。下手のようだな」

つまり寒かつたので小間使いの部屋で温まっていたというわけです。この辺り、海舟独特の毒舌と

そんなつまらないことをしてくるより
銅像を造る入費の三割一分でも
よいから金でももらいたいよ

もいえますが、海舟の談話を集めた『氷川清話』では、さらに手厳しく語っています。

「西郷の銅像を上野に建てたと、それが何だ。銅像はオーキニ有難うって御礼を言うかい。ヘン、銅像は口をきかないよ」

「十八日には是非、俺に銅像の前で演説でもやれと言うから、俺には演説などは出来ないからお前さん方に頼みますと言っておいたら、なかなか承知しないで、そんなら何か是非やれと言うから……」と歌を捧げたことを語りつつ、「往事茫々夢のごとくだよ。この

寒いのに上野へ引つ張り出されては、俺も困るじゃないか。みんながさぞ大きな顔をして行くだろうから、俺はどうしようノオ。折助（下男）の身なりでもして行こうかい」と毒づいています。

『氷川清話』は終始、このような語り口ですが、先述の通り、海舟は西郷像建立のため、資金集めもしており、必ずしも字面通りが本心とは思えません。

西郷の未亡人からの感謝に涙

実は除幕式から五日後の『朝日

新聞』の取材に対して海舟は、「行て見ると中々賑はしく西郷の未亡人や黒田さんの奥さんが大層悦ばれて、能く来て下されたあなたが御出で下さつた故西郷も彼の世で喜んで居りませうと云はれた時ハ己りや涙がこぼれて来たよ」と答えています。

「銅像はオーキニ有難うって御礼を言うかい」などと毒づく海舟も、西郷の未亡人・糸子にお礼を言われて、涙がこぼれて来たと言っているのです。

また川村が代読した歌に「我も老たり」と詠んだように、この時、海舟もすでに七十六歳。十二月の寒さが老齢の身体に厳しかったのも事実で、このほば一月後に、海舟は亡くなりました。

要するに海舟にとって、銅像はオマケで、盟友西郷の名誉が回復された憲法発布における大赦と、西郷の遺児である寅太郎や菊次郎の成長によって、自身の仕事は終わつたと考えていたのでしょうか。

この前年には寅太郎の結婚披露宴に主賓として出席しており、海舟は彼ら遺児をきちんと育て上げることが、西郷に対する恩返しと考えていたのです。

自身の銅像建立に反対

そもそも海舟は「銅像」というものに興味がなかったようです。『海舟遺稿』を編集した亀谷馨が海舟を訪ねた際の逸話があります。

ある日のこと。亀谷は「先生の存命中に銅像を作りたい」と願い出ました。ところが海舟は「銅像は人の造つたものゆえ、いつ何時、天災地変のために破壊されるか知れない。そうでなくとも、時勢の変遷によって大砲や鉄砲の弾丸に铸られるかもしれないよ。そんなつまらないことをしてくれるより、銅像を造る入費の三割一分でもよいから、金でももらいたいよ」と一笑に付したそうです。



西郷の妻・糸子『西郷南洲翁大書集』（大西郷追頌會）

おりや涙かこぼれて来たよ

その後、昭和の大戦で多くの銅像が大砲や弾丸と化していったことを、すでに予見していたようで、その見識には驚かされます。

この逸話からしばらくして海舟は亡くなり、時の海軍大臣であった山本権兵衛は、海軍省に海舟の銅像を建てようという提案しました。薩摩藩出身の山本は西郷の仲介により、海舟の知遇を得

て、海軍軍人の道を歩んでいった人物です。海舟には深い恩がありました。ところが海舟が生前、「銅像などを」と馬鹿にしていたと聞いて、この計画は取りやめにしたそうです。

亀谷馨の投書

一方、海舟の死から四日後の一



海軍省に建立されていた西郷従道(上段右)と仁礼景範像(上段左)、川村純義(下段右)の像。『京浜所在銅像写真 第1輯』(二六新報社編・人見幾三郎編・諏訪堂・明治四十三年)より転載 下段左は神戸に建立されていた伊藤博文像(編集部蔵)

月二十五日。葬儀が行われたこの日の『朝日新聞』には徳川慶喜や徳川家達をはじめとした人々が發起人となり、上野公園に西郷と同様の海舟像を建立し、両者を並立させようという計画があることが報道されています。

この計画のその後は不明ですが、海舟の亡くなった翌月の『風俗画報』では「東京人は勝伯を祭るべし」と題された次のような論説も掲載されています。「西郷の像は儘(まま)として上野山王臺に在り伯(海舟)の銅像を建つるも好し東京人は尚其祠廟を建てて毎年三月十五日(江戸城総攻撃の開始予定日)を以て勝伯の祭を致すも亦功恩に報ゆる所以にあらすや」。

です。この投書において亀谷は近年、盛んに建立されている銅像に關し、その意義は良いが、報本反始の理に反するものがあると嘆いています。

海軍省内に建てられている西郷従道・仁礼景範・川村純義の像を挙げ、三氏の功績を認めながらも、それならば、維新の前から海軍の発展に偉大なる功績のある人物がいるだろう。さらに神戸にある伊藤博文像に關しても、それ自体には賛同するが、それならば一漁村であった神戸の地に幕末、海軍操練所を設置し、その発展に貢献した人物がいるのではないかと強く訴えています。

つまり、なぜ海舟の像を建てないのかと憤っているのです。海舟自身は断ろうとも、やはり亀谷は海舟の銅像を建てたかったのです。

同様の意見は亀谷だけでなく、当時の雑誌などでも散見されますが、そこには藩閥政治に対する反発として、海舟の存在を利用

する思惑もあったようです。従道・仁礼・川村の三氏はいずれも薩摩藩の出身で、そういった藩閥政治に対する鬱憤が、海舟の像を望む形として現れた部分もあったように思われます。

ただし海舟の予言通り、亀谷が挙げた従道・仁礼・川村、そして伊藤の像はいずれも昭和の大戦における金属供出によって回収され、現存していません。もし海舟の像が建立されていたならば、やはり同様に回収され、弾丸と化していたでしょう。「それ見たことか」と、地下から海舟の声が聞こえるようです。

本山白雲が制作した胸像

維新の元勳の銅像を数多く造った彫刻家に、明治四年(一八七二)、高知県に生まれた本山白雲がいます。高知県桂浜の坂本龍馬像をはじめ、室戸岬の中岡慎太郎像、京都円山公園の龍馬・中岡

像、日光や高知城の板垣退助像など実に三百体以上の像を造りましたが、先の戦争による金属供出によって、その多くが姿を消しました。先述の海軍省内に建てられていた西郷従道・川村純義像も白雲の作品です。

白雲は師の高村光雲が上野の西郷隆盛像を制作した際、助手として、その制作にも携わっていました。昭和十四年(一九三九)の『朝日新聞』によると、白雲は西郷像の除幕式で海舟との知遇を得たそうです。以後、度々赤坂氷川の間海舟邸を訪れてはその姿をデッサンし、明治三十一年には海舟の胸像も制作したと報じられています。

ただしこの記事は、いささか時系列に疑問が残ります。明治三十一年十二月十八日の西郷像除幕式で白雲が海舟との知遇を得たのであれば、僅か二週間で海舟の胸像を製作したことになります。

半蔵門の幻の海舟像

白雲はその後、海舟の全身像も製作しています。これは海舟がかつて西郷隆盛に贈った自身の写真をモチーフとしたものです。

前述の『朝日新聞』は、この全身像が完成したことを報道したもので、記事には「江戸城明渡し



大田区の『勝海舟記念館』に展示されている本山白雲の海舟像。

行われたが、此両偉人のうち勝海舟翁の銅像は未だないので翁の舊門下生達は大變に残念がり頭山満翁、徳富猪一郎翁や荒木文相等が中心となつて数年前から銅像建設の實現に努めてゐたが、その制作を委嘱された世田谷區深澤町四ノ二五彫刻家本山白雲氏の苦心によりこの程立派な原型が完成、大森區洗足池畔の勝海舟墓前祭の日にこの喜びの報を故海舟翁の愛娘で現在唯一の肉親として健在である小

石川區原町の目賀田男爵母堂逸子刀自に渡された。銅像は一丈五尺で、右手に刀を持ち羽織袴姿、白雲氏會心の出來榮えで、來年二月十一日の忌日までには實物を仕上げ、市公園課で半蔵門附近を公園として美しく整備すると共に同地に建設する事になつてゐる」とあります。記事中、昭和十五年（一九四〇）には半蔵門付近を公園として整備し、銅像を建立する予定だと報じられていますが、これは実現

されなかつたようです。すでに世界では第二次世界大戦が勃発しており、日本にもその余波が広がつていた当時において、銅像の建立まで余裕がなかつたのだと思われず。そして昭和十六年（一九四一）、日本は開戦を決定。武器生産における金属資源不足を補うため、金属類回収令も制定されました。先述の通り銅像もまた、その対象となり、多くの像が「出兵」という形で回収されていきました。

戦中のある夜のこと。白雲の娘が銅像原型の一体一体を父自らが叩き割っている無念の姿を目撃しています。その時、母は白雲の傍らで静かに合掌していたそうです。「銅像は人の造つたものゆえ、いつ何時、天災地変のために破壊されるか知れない。そうでなくとも、時勢の変遷によって大砲や鉄砲の弾丸に鑄られるかもしれないよ。そんなつまらないことをしてくれより、銅像を造る入費の三割一分でもよいから、金でもらいたいよ」と語つた海舟の予言には、やはり複雑な想いを抱かせます。

海舟の銅像



墨田に建立された海舟像

時は流れて戦後。戦時中の金属供出によつて多くの銅像が失われましたが、やがて各地で再建が進められるようになりました。

敗戦という大きな社会の転換点を経て、銅像が再び建てられ

ていった背景には、日本人にとって銅像が単なる権威や権力の象徴ではなく、偉人の功績や精神を讃える「顕彰」の手段として根付いてきたことがうかがえます。

そして現代では、その価値観はさらに広がりを見せています。歴史上の偉人だけでなく、アニメのキャラクターの像までもが各地に登場し、銅像は今や「偉さ」を示すものではなく、人々の記憶や想い、地域の誇りを形にする柔軟で身近な存在へと変化しつつあるので

か建立に至りませんでした。昭和四十九年（一九七四）に、海舟の父・小吉と縁の深い能勢妙見堂（墨田区本所）に胸像が建立されたものの、ようやく本格的な銅像建立計画が動き出したのは、もはや二十世紀の終わり頃でした。

きっかけとなつたのは平成十一年（一九九九）、墨田区教育委員会生涯学習課主催の文化財特別講座における、鶴澤義行日本大学名誉教授の講演です。「墨田区と勝海舟」と題された講演の中で鶴澤教授は「江戸を戦

火から救い、今日における東京の

発展と近代日本の舵取り役を果

たした江戸の英雄・勝海舟の銅像がないのはおかしい」と話しました。これに受講した区民らが共鳴し、その場で鶴澤教授は講演料を合わせた三万円を勝海舟像建設のために募金されました。これがはじまりとなり、「勝海舟の銅像を建てる会」が発足。計画が動き出したのです。

かくして平成十五年（二〇〇三）七月二十一日、墨田区役所うるおい広場にて除幕式が執り行われ、江戸城無血開城時の四〇代の海舟像が建立されるに至りました。

銅像の建立により「勝海舟の銅像を建てる会」は解散となりましたが、「今後も勝海舟の功績を語り継ぎ、その精神を継承して」と、会の副会長であった廣田健史氏が代表世話人となって、「勝海舟顕彰会」が発足されました。以後、毎年「海の日」には海舟像に隣接する「すみだリバーサイドホール」にて、「海舟フォーラム」が開催され、海舟のご子孫である高山みな子氏（本誌顧問）の講演を中心に、その顕彰活動が続けられています。

※来年、令和八年の「海舟フォーラム」は「曳舟文化センター」での開催予定です。



全国の主な海舟像

- 【A】勝海舟・坂本龍馬の師弟像（東京・港区）
- 【B】勝海舟之像（静岡・島田市）
- 【C】日本の恩人（勝海舟・頼山陽）像（熊本・天草）
- 【D】横井小楠と維新群像（熊本・熊本市）
- 【E】象山門下群像（長野・長野市）



勝海舟銅像建立までの軌跡

平成十一年十一月二十七日
鶴澤義行日本大学名誉教授の講演がきっかけとなり建立運動がはじまる。

平成十二年五月十九日
両国公会堂にて設立総会。国会議員含め七十二名が参加。

平成十三年六月一日
平成十三年十一月二十四日
事務局を「墨田区文化観光協会」内に設置。

平成十三年十二月二十八日
山崎昇墨田区長、山本賢太郎都議会議員、服部ゆくお都議会議員と鶴澤会長がアサヒビル社長を訪問し、銅像建設への協力を依頼。
山本・服部両都議の提唱により、勝海舟の銅像建設のために都議会が議員連盟結成を表明。

平成十四年四月十八日
平成十四年七月九日
両国第一ホテルにて「勝海舟の銅像を建てる会」の記者発表。竣工は翌年七月二十二日(成臨丸にちなみ海の日に決定)。

平成十五年五月十四日
墨田区役所みどりの広場にて起工式。

「勝海舟の銅像を建てる会」は、墨田区文化観光協会、「墨田区役所」・工事関係者、銅像制作関係者、木内先生等、五十名ほどで台座工事の鉄入れ。

平成十五年七月二十一日
墨田区役所うるおい広場にて除幕式。

廣田会長は墨田のご出身ですか？
はい。墨田で生まれ、墨田で育ち、そして墨田で暮らし、墨田で事業(株式会社環境整備/横川3)を行っております。

銅像建立の計画はどのようにはじまったのですか？
平成十二年に、日本大学の名誉教授である鶴澤義行先生が行った講演がきっかけでした。「江戸を戦火から救い、今日における東京の発展と近代日本の舵取り役を果たした江戸の英雄・勝海舟の銅像がないのがおかしい」と話され、それに受講した区民が共鳴して、建立運動がはじまったわけです。その場で十六人の受講者が寄付を申し出、鶴澤先生の講演料と合わせて、三万円が集まりました。これがはじまりとなり「勝海舟の銅像を建てる会」が発足して、計画が動き出したのです。

ましたが、私の学生時代の恩師でもあります。私も先生の講演を拝聴し、勝海舟という郷土が生んだ一人の男への尊敬の念が深まり、建てる会の副会長として運営に参画して参りました。建立までの道のりで苦労した点はどういうところですか？
関係各所への折衝や政治家などへの協力依頼など、様々な苦労がありました。が、やはり一番は資金面です。ちょうどバブルの崩壊があり、当初一億円を集める計画が、半分までしか集められず。ただ設置場所など、墨田区の協力もあり、何とか進めていくことができました。銅像の制作者はどのように決まったのですか？
大久保利通像など、鹿児島で多くの像を彫刻されている故中村晋也先生など、様々な方々から立候補がありましたが、最終的には地元・墨田が本籍の故木内禮智先生に依頼しました。先生は

墨田区に建つ 勝海舟銅像制作秘話

墨田区役所うるおい広場に建つ、凛々しい勝海舟像。その裏には、地域の歴史を次世代に伝えたいという熱い思いがありました。当時の「建てる会」副会長の廣田健史氏に誕生の経緯や秘話を伺いました。



上野の東京芸大に学んだ頃から、近くには西郷像があり、いつか勝海舟の像をつくりたいと思っていたそうです。

像のデザインについては、海舟が無血開城談判を行った四十代、壮年期の姿です。像が指さしている先には大川(隅田川下流)があり、その先には江戸湾、そして世界に続く道筋、日本の針路を示しています。

像の完成後、「建てる会」は解散となったのですが、鶴澤先生は「銅像を建てるだけでは意味がない。銅像が勝海舟の精

神を伝える存在となるためには、その顕彰活動も続けていかなければならない」とおっしゃり、「勝海舟顕彰会」の立ち上げが決まりました。皆様の善意で建てられた銅像と海舟の精神を末永く継承し続けるためには、銅像の顕彰はもちろん、維持・管理も必要です。そこで「建てる会」の副会長でした私が、各階層の仲間に呼びかけ、顕彰会を立ち上げる運びとなったのです。顕彰会ではどういった活動がなされていますか？
毎年、海の日に銅像横の「すみだリバーサイドホール」にて「勝海舟フォーラム」



勝海舟の銅像を建てる会 設立メンバー

【左より】久保雄三郎・板橋秀幸・丸山 茂・橋本喜代治・坂田秀男
安川一郎・山崎 昇(墨田区長)・音頭正治・鶴澤義行・小澤将之
山田 実・中村廣一・木内禮智・廣田健史・北村日出夫・保科 修
【前列】山口千鶴子・今泉春子 【欠席】大室輝雄

勝海舟顕彰会のホームページがリニューアルOPEN!!
勝海舟フォーラムの最新情報などもこちらからご覧ください。

katsu-kaisyu.net

を開催しております。顕彰会の顧問も務めて頂いている海舟の玄孫・高山みな子さんの講演をはじめ、毎回、多彩なゲストをお呼びして、大勢の人々にお集まり頂いております。(※来年2026年は改装工事のため、「曳舟文化センター」での開催を予定しています。)最後にひとことお願いします。
近代日本構築の最大の功労者である勝海舟の過去の功績を顕彰することはもちろんのこと、これからの将来の日本を背負って立つ青少年諸君や、教育・歴史・文化を重んじる方々にぜひ、海舟の精神を受け継いでもらいたいと考え、この活動を運営させて頂いております。生まれ育った墨田の地に建立された銅像が、海舟精神の発信基地となることを願っております。

両国駅の南側、現在、両国小学校の隣にある両国公園(両国四丁目)、ここには海舟の祖父、男谷平蔵の屋敷があった。平蔵の三男が海舟の父、小吉。小吉は勝家に養子に入ったが、勝家の当主夫妻が若くして亡くなってしまったので、祖母と幼い孫娘が残されており、平蔵が二人を引き取って暮らしていた。

小吉は子どもの頃から破天荒、七歳の時、大勢を相手に喧嘩、負けると



【海舟生誕の地 石碑】この石碑を揮毫してくださったのは西郷隆盛公の孫で当時法務大臣だった西郷吉之助さん。筆者はその方の息子さん、つまり隆盛公のひ孫の方とは親しい。隆盛公と海舟の友情は150年以上の時を経て、いまでも子孫たちが引き継いでいる

海舟 逍遥

【かいしゅう しょうよう】

第一回 ● 墨田と海舟



ライター・勝海舟・玄孫
高山みな子

「解体新書」を翻訳させたりする。

その時、辞書がなく皆が翻訳に苦労しているのを見て、五代藩主・奥平昌高が、「蘭語訳撰」「バスタールド辞書」という蘭和・和蘭辞書を作成させた。



【回向院】幼い海舟は祖父である男谷平蔵に連れられ、相撲の興行を見物にきていたかもしれない。



【回向院の力塚】海舟がことのほか可愛がった徳川家16代家達公の揮毫による。

そういう土地柄のところの出身である島田は、剣術修行に専念しながらも、これからの新しい学問の必要性

は肌身感じていたはずだ。だから師範代をして大名屋敷を回って稽古をつけていた海舟に、竹刀を筆に持ち替え、西洋の学問を極めよと言ったのだらう。

海舟も素直にそれに従い、入門先を探し福岡藩の永井青崖のもとに通うようになる。

余談だが、島田の出身地、中津藩第三代藩主・昌鹿は薩摩藩第八代藩主・島津重豪ととも仲がよかった。中津藩第五代藩主の昌高は重豪の息子、福岡藩第十一代藩主、黒田長博も重豪の息子である。海舟が学問を志して貧乏をしていた時に支援してくださった島津斉彬は重豪の曾孫で、弟の久光や西郷隆盛、大久保利通などを海舟に紹介してくださっている。海舟と薩摩は浅からぬ因縁があり、それが江戸城無血開城につながっていくと思うと、人間関係の渦は興味

情けなくて切腹しようと脇差を抜いて腹へ。近くにいた米屋さんがそれを止めて、家まで送ってくれたという。十四歳になると今度は家出をして一人伊勢へ向かう。江戸を出てあつというまに護摩の灰に全て持っていかれ、残ったのは襦袢一枚。宿屋の主人から渡された柄杓を持って物乞いをしながら目的地を目指す。帰り道も漁師の養子に乞われたり、崖から落ち急所を痛めたりと冒険もいとこ

が尽きない。

ここで海舟は墨田を離れるのだが、当時、一年でオランダ語から日本語への辞書「ゾーフ・ハルマ」を二部筆写、一部を売って辞書の借り賃や筆、紙代、生活費にあて、一部を自分の蘭学塾に残した。この辞書のおかげで塾は流行り、幕臣たちも入門している。

辞書の書写は三〇〇枚にもおぼる。この筆写は並大抵の心構えではできないと思われる。やはり少年時代最初に指南を乞うた、聖剣と言われた年長の従兄、男谷信友やその弟子、島田虎之助の厳しい修行の連携プレーの賜物だったのではあるまいか。

海舟は人に恵まれた。先を見通す



高山みな子
Kohyama Minako

慶應義塾大学文学部卒業。会社勤務を経て旅行・紀行雑誌、企業広報誌などの執筆活動をしつつ、勝海舟子孫として講演や各種イベントに参加。高知県観光特使、長崎市観光大使、三重県松阪市ブランド大使、東京都港区観光大使を務める。共著に「勝海舟関係写真集」(出版社 風狂童子)、「日本全国ユニーク個人美術館」「日本全国ユニーク個人文学館・記念館」(新人物往來社)など多数。

るだ。あやうくお家断絶寸前で帰宅したものの、こういう性格では落ち着くところを知らない。あれこれしてかして父・平蔵の屋敷の座敷牢に押し込められていた時に海舟が生まれた。海舟がどこまで父親の血を引いたかわからないが、幼少期、親戚のついで大奥へ上がった時、利発な子どもであると將軍の目にとまり、第十二代將軍家慶公の五男、初之丞君のお遊び相手に抜擢された。

結果的には初之丞君が早逝されて、小吉いわく、青雲を踏み外すのだが、踏み外したおかげで海舟は次のステージへ進んでいく。

海舟の剣術の師匠、島田虎之助は中津藩(現・大分県中津市)出身、中津は京都で始まった人体解剖が盛んに行われた地である。三代藩主、奥平昌鹿が、母親の骨折を長崎から参府した蘭方医(西洋医学の医者)が見事に治したということで、蘭学(西洋の学問)に目覚めた。その後、前野良沢を長崎に留学させたり、江戸藩邸で

ことができる師匠達に巡り合うことができたのである。これは一つの幸運だが、海舟の強さは、この幸運を逃さなかったことであろう。しっかりと自分の身に引きつけ、確実にそれを自分の血肉としている。墨田はこうして海舟が世に踏み出すための土台を作ったところと言えるのだと思う。

墨田での修行の日々がなければ、一道場主として一生を過ごしたかもしれない。ペリーが来航した時に意見書を書くこともなく、幕末の歴史に触れることもなかったかもしれない。

誰に、誰からの紹介で出会うか、それはあの時も今も変わらない、大きな出来事なのだと思う。



【向じま 志満ん草餅】草餅7個折入1425円。

墨田区堤通1-5-9 / 電話: 03-3611-6831 / 定休日: 毎週 水曜日 / 9時~17時 (16時以降はなくなり次第閉店)

草餅には「あん入り」と「あんなし」の二種類がある。「あん入り」には、北海道十勝産の小豆を使った自家製のこし餡が包まれている。よもぎの風味を損なわぬよう、決して多すぎることなく、絶妙なハーモニーを奏でている。真ん中がくぼんだユニークな形の「あんなし」は、かつて渡し船の客が食べ歩きしやすいように工夫された形の名残だという。白みつときな粉をのせて味わうことができる。



海舟の時代を知る、味の継承者

墨田幕末明治グルメ

第1回 ● 向じま 志満ん草餅 (明治二年創業)

志満ん草餅が創業されたのは、維新間もない明治二年のこと。隅田川の渡し船で往来する客を相手に、草餅が名物の茶店として創業された。変わった屋号の『志満ん』は、その響きのとおり「自慢」を意味しているが、決してうぬぼれからではなく、どこへ出しても誇れる草餅を「志」を込めて作る、という思いから名付けられた。

志満ん草餅の特徴は何と言ってもその鮮やかな緑である。何とも食欲をそそるその色合いは、生のよもぎを使用しているためである。創業当時は隅田川の土手で手摘みしていたというが、現在は各地から取り寄せた厳選の国産よもぎを使い、一口食べれば口いっぱいによもぎの香りが広がる。

草餅には「あん入り」と「あんなし」の二種類がある。「あん入り」には、北海道十勝産の小豆を使った自家製のこし餡が包まれている。よもぎの風味を損なわぬよう、決して多すぎることなく、絶妙なハーモニーを奏でている。

真ん中がくぼんだユニークな形の「あんなし」は、かつて渡し船の客が食べ歩きしやすいように工夫された形の名残だという。白みつときな粉をのせて味わうことができる。

大山巖が揮毫した表忠碑

両国橋を渡ってすぐ、両国橋児童遊園の一角に、「表忠碑」と刻まれた堂々たる石碑が建立されている。これは、日露戦争に東京市本所区から出征し、戦病死した人々の霊を慰めるため、明治四〇年に建立されたものだ。碑文の揮毫を手がけたのは、日露戦争で司令官を務めた元帥・大山巖である。

大山巖は幕末の薩摩藩に生まれた。西郷隆盛の従兄弟にあたり、若き日にはスイカ売りに扮して薩英戦争に参加したこともあった。戊辰戦争では砲隊長として出陣し、会津若松城攻撃に参加。西南戦争においては西郷軍を迎え撃つ立場となった。その後は陸軍大臣を務め、日本陸軍の近代化を牽引した。満州軍総司令官として日露戦争を勝利に導いたことはよく知られる。



勝海舟と大山との関係は、それ程親密なものではなかったものの、いくつかの交流記録が海舟の日記などからうかがうことができる。たとえば、明治三年七月の日記には、大山から静岡への届け物を頼まれ、海舟がそれを引き受けた記述がある。また、明治十八年の四月は星ヶ岡茶寮にて、三島通庸らとともに会食した記録が見られる。さらに吉井友実の病状を尋ねる大山宛の書簡なども残されている。



墨田の石碑でめぐる 海舟 筆縁地図 vol.01

墨田区に点在する歴史的な石碑の数々。それらに刻まれた碑文や揮毫を手がけた人物と、勝海舟との知られざる縁を紐解きます。

表忠碑 (両国橋児童遊園)

大山巖・榎本武揚との縁

海舟と大山巖のつながり

勝海舟と大山との関係は、それ程親密なものではなかったものの、いくつかの交流記録が海舟の日記などからうかがうことができる。たとえば、明治三年七月の日記には、大山から静岡への届け物を頼まれ、海舟がそれを引き受けた記述がある。また、明治十八年の四月は星ヶ岡茶寮にて、三島通庸らとともに会食した記録が見られる。さらに吉井友実の病状を尋ねる大山宛の書簡なども残されている。

裏面には榎本武揚の名前も

表忠碑の裏面にも注目したい。「本所区陣没者弔魂祭并凱旋軍人歓迎會會長 海軍中将正二位勲一等子爵 榎本武揚」とある。榎本は日露戦争当時、す

大山巖

天保13年10月10日 ~ 大正5年12月10日

薩摩藩出身で、西郷隆盛の従弟。幕末期には寺田屋事件や薩英戦争に関わり、倒幕運動に奔走した。戊辰戦争にも出陣。維新後はフランスに留学し、日本陸軍の基盤づくりに尽力した。陸軍卿・参議・参謀本部長を歴任し、陸相となる。日清戦争では第2軍司令官、日露戦争では満州軍総司令官を務めた。後に公爵となり、晩年は内大臣として国家の重責を担った。



海舟は日清戦争に強く反対し、さらにその先に迫る戦火をも予見しながら、日露戦争の五年前に世を去った。同時代を生きた大山巖や榎本武揚の名が刻まれたこの「表忠碑」は、戦争の記憶と、時代の転換点を物語る存在として、幕末から連なる近代史を静かに伝え続けている。



でに政界から退いていたが、向島に居を構えていた。軍人歓迎會會長となつたのも、その関係であろう。榎本の向島邸には海舟も何度か足を運んでいる。

本誌では「秀英体」というフォントを多く使用しています(この文章は「DNP秀英アンチック」。「秀英体」は現在の大日本印刷(DNP)が明治以来、一世紀以上にわたり磨き続けてきたオリジナルフォントです。

大日本印刷の源流は明治九年、佐久間貞一らによって創業された「秀英舎」にさかのぼります。佐久間は戊辰戦争の際に彰義隊へ参加した人物で、維新後は実業界で活躍しました。勝海舟の日記にもたびたび登場し、ときに資金援助を受けることもありました。

その「秀英舎」の社名を命名したのが、ほかならぬ海舟でした。当時、強大な力を誇った英国に、なお秀でる存在となるようにとの願いを込めて、「秀英舎」の三文字を託したのです。以来、同社は印刷文化を支える大きな柱となり、昭和十年には日清印刷と合併して大日本印刷が発足しました。現在もな



佐久間貞一
『株式会社秀英舎創業五十年誌』より

特別コラム

海舟とフォントの話

元彰義隊隊士 佐久間貞一の秀英体

元薩摩藩士 神崎正誼の弘道軒清朝体

お「秀英体」の系譜は受け継がれ、百年以上にわたって息づき続けています。海舟が名付けた「秀英」の響きが遺るこのフォントを本誌では基本書体としていのです。

海舟、縁のもうひとつのフォント

本誌ではもうひとつ、海舟と縁のあるフォントを用いています。独特の鋭さと風格を備えた「弘道軒清朝体」です。このフォントは、薩摩藩出身の実業家・神崎正誼が明治初年に創業した活版製造所「弘道軒」によって作られました。神崎は金属を直接彫るとい新し

い手法を用い、他にはない鋭角で力強い「清朝体」を生み出したのですが、その完成には十年もの歳月がかかり、幾度も資金難に見舞われました。全財産を注ぎ込み、途方に暮れた神崎を支えたのは、同郷の薩摩人たちと、海舟の援助でした。海舟の日記にはやはり神崎の名前も頻出し、借金の様子なども記



神崎正誼
『印刷雑誌』印刷雑誌社より

されています。時に神崎と佐久間が揃って、海舟を訪ねたこともあったようです。

こうして結実した「弘道軒清朝体」は、やがて「東京日日新聞」に採用され、当時を代表する流行書体となりました。現在はイワタによって復刻され、再び注目されるフォントとなっています。

本誌では、この「秀英体」と「弘道軒清朝体」という二つの海舟ゆかりのフォントをあえて選び、随所に使用しています。

ページ内の各所で、活字に刻まれた歴史とともに、海舟の息づかいをも感じ取っていただければ幸いです。



監修・森重和雄
古写真研究者・作家

国立大分大学経済学部経済学科卒。株式会社電通映画社(現・電通テック)勤務を経て、写真史家・古写真研究者・作家となる。主な著書に『幕末・明治の写真師列伝』、『幕末明治の写真師 内田九一』、『英傑たちの肖像写真』、『復刻版 日清戦況写真』、『大久保家秘蔵写真 大久保利通とその一族』、『下関運杖 日本写真の開拓者』、『勝海舟関係写真集』、『坂本龍馬関係写真集』などがある。

わり目を象徴する、きわめて興味深い写真である。

「東都随一」の写真師・内田九一

内田九一は弘化元年、長崎に生まれた。幼少期に両親を失い、その際に松本良順の庇護を受けたという。良順は当時、長崎でポンペに師事していた。

やがて大阪で写真館を開いた九一は、慶応四年に横浜馬車道へ移った。そして明治二年、東京浅草大代地に開いた写真館が海舟も撮影に訪れた「九一堂萬壽」である。当時の住所は「浅

草瓦町二十五〜二十七番地」、現在の柳橋一丁目二十四番地付近にあたる。

明治五年には明治天皇の撮影も担当し、「東都随一」の名を馳せた。

その後、明治七年に神田駿河台紅梅町に洋館兼写真館を新築するが、引越越しを目前に病没した。

海舟の日記には、九一の遺品である唐風のベッドを松本良順から譲り受けたとの記録も見られる。

維新後の勝海舟を写した写真に、洋装姿という珍しい一枚がある。番はずでなく、四十代ほどに見えるこの写真について、古写真研究者・森重和雄氏は、内田九一が明治四年十月十日に撮影したものだ指摘している。台紙の裏面には「東京浅草 横浜馬車道 内田」と印刷されており、九一による撮影であることが確かめられる。森重氏によれば、これは明治のはじめ頃、内田写真館で多く用いられた台紙であるという。

海舟は九一を非常に最層にしており、現在確認されている九一撮影の海舟写真は六種類(うち二種類に別カットあり)に及ぶ。海舟の日記にも「九一へ写真に行く」、「内田九一、日光・芝・上野の写真持参」などの記述が見られ、両者の親しい交流がうかがえる。森重氏は、これらの日記の記述から撮影時期を一つひとつ特定している。

第1回 断髪直後の洋服を着た勝海舟

明治四年十月十日【内田九一の写真館(東京・浅草)】



編集部 三澤敏博蔵

森重和雄・高山みな子・三澤敏博 共著『勝海舟関係写真集』絶賛発売中!



1998

「勝海舟の銅像を建てる会」発足

墨田に生まれた江戸の英雄



2003

「勝海舟顕彰会」発足

2002

銅像建立

勝海舟顕彰会

Katsu Kaishu Memorial Association

平成十一年十一月、鶴澤義行日本大
学名誉教授による「墨田区と勝海舟」
についての講演がきっかけとなり、墨
田区における勝海舟の銅像建立運動
がはじまりました。

その後、「勝海舟の銅像を建てる会」が
発足し、区議会議員・国会議員をはじ
め数々の協力を得て、平成十五年七月
二十一日、墨田区役所うるおい広場に
て現在の勝海舟像の除幕式が執り行
われました。

翌年二月、「勝海舟の銅像を建てる会」
は解散しましたが、「今後も勝海舟の
功績を語り継ぎ、その精神を継承し
ていこう」との思ひから、「勝海舟顕彰
会」が新たに発足しました。
毎年「海の日」には「海舟フォーラム」
が墨田区で開催され、勝海舟の精神が
語り継がれています。

【会長】 廣田 健史 【実行委員長】 長谷川 由美 【副実行委員長】 久力 一雅 【役員】 長岡 靖浩・平野 善彦・佐伯 彰一・渡邊 秀行・山口 千鶴子・大谷 浩一郎・下村 みどり・片山 真一・松田 丈史・猪越 太一・杉山 正純・後原 健・大塚 武敏 【顧問】 高山 みな子 【相談役】 板橋 秀幸・中川 圭造

【協力】 東京向島ロータリークラブ・(公社)東京青年会議所墨田区委員会・本所防犯協会・日本大学校友会東京都第六支部・日本大学校友会墨田桜門会・向島消防少年団・(株)環境整備